

---

# 季節外れの桜が咲いたら

kotorinakisekai

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

季節外れの桜が咲いたら

### 【Nコード】

N2427Q

### 【作者名】

kotorinakisekai

### 【あらすじ】

その村には一本大きな桜があった。  
ある年の秋にその桜が急に花を咲かせた。そしてそれと同時に謎の病が村を襲い、村は滅んでしまった。  
後に残ったのは寂しい村と花の咲いた桜だけ……。

【この作品は他サイトと二重投稿しています】

その村の近くには一本だけ大きな桜の木がある。見晴らしのいい場所にポツンと一本だけ生えているその桜は、春が来るたびに村人たちを楽しませていた。

ある年の秋に、突然その桜の花が咲いた。始め村人達は不思議に思ったが、季節外れの花見ができると喜び、深くは考え無かった。しかしそれから数日後、村に謎の病気が流行り始めた。

次々と倒れて死んでいく村人達。村の医者にも原因が分からず、村人達は季節外れの桜が原因なのではないかと噂し始めた。しかしその噂が広まり始めることには村人の半数は死に、もはや村は再生不可能な状態に陥ってしまった。

「桜が原因であるというなら、近づくのは危ない。黙って村を出て言った方が安全だ」

村人の誰もがそう考えて次々に村を去り、結局桜が着られることは無かった。

後に残ったのは誰もいない寂しい村と、死粉をばらまくという噂がついた桜だけが残った。

それからしばらくして、何も知らない旅人がこの村を訪れた。

村にはだれも住んでいなかったが、廃村にしては家や建物がしっかりしている。旅人は奇妙に思いながら村の中を歩き回っていた。すると、花が咲いた大きな桜の木を見つけた。

旅人は季節外れの桜の花を見られたことに喜び、その桜を見ながら酒を飲むことにした。花が風に散る風景が何とも美しかった。

「その桜に近づかない方がいいですよ」

旅人が桜を見上げながら酒を飲んでいると、女の声が聞こえてきた。声のした方を見ると美しい女が旅人のことを見ていた。

「それはどうということだ？」

「この村にはたくさんの方が住んでいました。しかしこの秋にその桜が咲いてから次々に死んでいったのです。その桜が村人達を呪い殺したに違いありません。現に今も季節外れの花を咲かせています。きつと次の犠牲者を誘っているに違いありません」

その話を聞いて旅人は笑う。女はそんな旅人の態度が気に入らなかつたようだ。

「信じられませんか？」

「いや、信じる。村の様子がおかしいとは思っていたんだ。そんな事情があつたのなら村を捨てて村人達が逃げ出すのも分かる」

旅人はそこで酒を一口飲んだ。

「ではなぜあなたは逃げないのです？ なぜ笑つたのですか？」

「気を悪くしたなら謝る。こんな美しい桜に殺されるのなら、旅の終わりとしては悪くないと思つたのだ。これだけ見晴らしがいい場所なら、死んだ後も退屈はしないだろう」

旅人はそう言つてまた一口酒を飲んだ。女は旅人が逃げ出さないのでと分かれると、自分も桜の木の下に座り、旅人から酒を分けてもらつて酒を飲み始めた。

「しかし、その話が本当なら、なぜこの桜は村人たちを殺したりしたのだらうな？ 長く生きているうちに魔性の桜になつたのだらうか？」

「寂しかつたのだと思います」

旅人の呟きに女はそう答える。

「桜はこのあたりに一本しかありません。桜が無いだけならまだしも、この場所には他に木が生えていない。春はいいです。村人達がこのあたりに集まつて宴会をしますから。それ以外の季節に葉っぱだらけの桜の木を見に来る村人達はいませんでした。だから、桜は村人達を呼ぶために、春でもないのに花を咲かせた」

女はそこで酒をグイッと飲んだ。酒には強くないと見えて、顔がほんのり赤くなつていた。

「季節外れの桜が咲いて、村人達は集まつてきました。しかし桜は

そこで気がついたのです。村人達は桜の木を見てなどいないと……。村人達はここに集まって宴会がしたいだけ。たくさんの人がいる中の疎外感。桜は前以上に孤独でした。だから桜は死粉を風に混ぜて飛ばした」

女は立ち上がって前に数歩歩いた。

「村人達はバタバタと死んでいき、桜の木はさぞ溜飲が下がったことでしょう。しかし、村人達が一人もいなくなって、今度こそ本当の孤独が桜の木を包んだのです」

風に混じって女の涙が光った。旅人はその涙が花びらになったように見えた。

「なるほど……。孤独から村人達を殺したのか。しかし一つ気になることがあるな。村人達はいなくなったはずだろう？ なぜ君はここにいるんだ」

「それは……」

女は答えなかった。しかし旅人にはその沈黙が答えになった。

旅人はにやりと笑って桜を見上げる。

「美しい桜だ……。自分に自信があるというなら誰かに見てもらいたいと願うのは、非常に正当なことだ。君の話では俺は死ぬことになるはずだが、もし生きて明日を迎えられたなら、俺は来年の春またここを訪れよう」

「……本当に？」

旅人は桜の木に向かって話していた。しかしその言葉に女が返事をする。

「旅人は退屈を嫌う。悲しい話を聞かされたら、すっかりこの桜が気に入ってしまった。きつと桜に会いに来るさ」

「ありがとう……」

女の言葉に旅人が顔を下げると、そこには誰も居なくなっていた。

「……本当に美しい桜だ」

旅人はそう言ってまた一人酒を楽しむのだった。

気付くと寝入ってしまったらしい。旅人が目を覚ますと朝に

なっていた。旅人の体に異変は無い。

次の年の春。旅人は約束を守り桜の木に会いに来た。一本の桜の苗木を持って……。

(後書き)

この小説を読んだ方に、幸福がおとずれることを祈っております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2427q/>

---

季節外れの桜が咲いたら

2011年9月8日03時30分発行